

出雲市・高野寺観音菩薩立像と日蔵寺十一面観音菩薩立像について

—近年再発見の出雲市内所在平安彫刻二例—

濱 田 恒 志

はじめに

本稿で紹介するのは、近年出雲市内において平安時代の作と新たに確認された二つの観音菩薩像である。出雲地方に優れた平安彫刻が多く伝わっていることはかねてより知られており、重要作例は国や地方自治体の文化財に指定されている。さらに近年、調査研究や展覧会が重ねられたことにより、新発見・再発見の作例が報告されることも増えてきた。⁽¹⁾ここに紹介する二作例も、それに連なる存在である。両像は、既に平成二十九年(二〇一七)の島根県立古代出雲歴史博物館特別展「島根の仏像」で寺外初公開し、⁽²⁾同展図録にて概要を紹介しているが(以下、「前稿」⁽³⁾)、両像をめぐっては展覧会后、新たな知見や展開があり、また前稿を訂正すべき箇所もあったので、本稿ではそれらを含めたかたちで改めて詳細を報告したい。

ところで、出雲地方では多くの重要作例・個性的作例が知られる一方で、それらが様式上あるいは宗教上、互いにどのような関係を有していたのか、という点については検討が十分に及んでいないのが現状であろう。これから述べるように本稿で報告する二作例は、この問題についても重要な示唆を与えてくれると思われるので、その見通しもあわせて言及しておきたい。

一、高野寺観音菩薩立像(図1)

(一) 本像の概要

〔形状〕

球状の単髻を結う。天冠台は下から紐一条、連珠文帯、紐一条、無文帯か。頭髮は両耳より前面は疎ら彫り、他は平彫りとみられるが朽損により判然としない。三道相の有無も不明である。条帛、天衣、裙(折り返しつき)、腰布を着ける。正面を向き、左手は屈臂して掌を内に向けて全指を曲げて持物(未敷蓮華。写真では外してある)を執り、右手は肘をゆるく曲げながら垂下して掌を正面に向けて下げ、腰をわずかに左に捻って立つ。

〔法量(単位はセンチメートル)〕

像高	一一九・七	頂―顎	二七・八
髮際高	一〇五・〇	面幅	一二・五
面長	一三・四	面奥	一七・九
耳張	一四・五	腹奥	一九・七
胸奥(左)	二一・四	腋下張	一八・五
肘張	三五・二	足先開(外)	二〇・六
裙裾張	二六・一	足先開(内)	九・二

〔品質構造〕

木造。一木造り。古色。

頭体幹部は左手の肘までを含めカヤの⁽⁴⁾一材製。内割り無し。木芯は像右斜後方をかすめる。左手は肘、右手は肩で別材を矧ぐ。両足先、左右の天衣垂下部も別材製。現状の表面は全面的に黒色の古色塗り。

〔保存状態〕

左手の肘から先および持物、背面左肩の薄材、右手の肩から先（体幹部との間にマチ材一材を矧ぐ）、両足先、左右の天衣垂下部は後補。像底の角柄穴も後補（後補の台座と本体を緊結させるための処置）。表面の古色塗り後補。近時まで金銅製宝冠・台座・光背を備えたがこれらも後補。像正面の上半身左半や背面全体にかけて、朽損が著しい。

（二）来歴と再発見の経緯

高野寺は出雲市野石谷町に所在。島根半島に聳える高野寺山の山腹に営まれた山岳寺院である。同寺の歴史については、寛文六年（一六六六）の当寺縁起や享保二年（一七一九）の『雲陽誌』など近世以降の地誌類により知ることができる。⁽⁵⁾それによれば、天長年間（八二四～八三四）に弘法大師がこの地を巡錫した折に当寺を開基したと伝える。鎌倉時代・十三世紀半ば頃、紀州高野山よりこの地に来た法性阿闍梨が中興するも、天正年中（一五七三～一五九二）、尼子の乱により堂塔の多数が焼かれたという。『雲陽誌』には、江戸時代当時の同寺本堂に八尺の胎藏界大日如来坐像や七、八尺ほどの千手観音菩薩坐像、四天王像や阿弥陀三尊像など多数の像が安置されている様子も記されているが、本像に相当するような像の記述は無い。⁽⁶⁾

その後、八束郡秋鹿村（現・松江市秋鹿町）の高祖寺住職、大律師丈雄比丘が兼務し復興するも、弘化五年（一八四八）、火災により本堂その他を焼失し、替わって庫裡に安置されていた聖観音菩薩立像を本尊としたという。⁽⁷⁾これが本像に相当する可能性が高い。また『雲陽誌』に記載されていた各種の仏像は現存せず、この火災で失われた可能性が考えられる。本堂は文久元年（一八六一）に再建されるも、昭和十八年（一九四三）と翌年の暴風雨によって倒れてしまったという。本像の表面が江戸時代かとみられる後補の古色塗りで覆われながら、そのうえさらに広い範囲で朽損しているのは、江戸時代の修補以後にこうした状況下で雨水を被った影響が考えられる。

その後、同寺はしばらくそのままの状況に置かれたようであるが、昭和三十年（一九五五）、従来あった奥の院御影堂が境内地に再建され、⁽⁸⁾これにより現在まで法灯が伝えられている。奥の院再建を伝える昭和三十年当時の地元新聞記事には本像の写真が掲載されており、⁽⁹⁾恐らくそれとあまり隔たらない頃に県文化課（当時）が調査した形跡があるが、以後、本像の存在が紹介される機会は次第に少なくなり、寺院関係者や地域住民を除いてほとんど知られることのない状態が長く続いていた。時を経て、平成二十七年（二〇一五）十一月、島根県古代文化センターは高野寺奥の院の棟札を調査する機会に恵まれ、その際に随行した本稿筆者が本像を確認した。一見して平安前期に遡る古像だと判断でき、適切な保存環境が望まれたため所蔵者と協議を続け、平成二十九年（二〇一七）に古代出雲歴史博物館へ寄託されるに至った。同館にて本格調査を実施し、⁽¹⁰⁾後に同年の同館特別展で一般公開したのは先述の通りである。

（三）制作年代の再検討―萬福寺（大寺薬師）諸像との比較を通して―

次に、造形上の特徴や諸作例との比較を通して、本像の制作年代を検討したい。あらかじめ述べておくと、本稿筆者が前稿で示した見解には若干の修正が必要と感

じており、この点も併せて説明したい。

まず構造の特徴について確認する。左手の肘まで含めて全体をなるべく一つの頭体幹部材から彫成しようとする点や（当初は右手もそうであった可能性がある）、内割りを施さない点など、一木造りのなかでも古い特徴を示しており、制作年代としては平安前期、九世紀から十世紀頃の間がまずは想定される。

次に各部表現を頼りに絞り込みを行いたい。球状の大きな単髻を有すること、慈悲相にしては厳しい表情、小さめの頭部、腰高のすらりとした伸びやかな体軀、頭体を通してS字を描く側面観、などが特徴として挙げられよう。

これと同様の特徴を有する著名な一木彫像として、大分・天福寺奥院の木彫仏像群のうちの菩薩立像を挙げることができる。高宮なつ美氏は同群像について、八世紀の作である同寺塑像と同様の表現が見出せることや、本体とともに蓮台や心木までを一材で彫成する古様な構造から、それらを八世紀後半から九世紀初めの作と判断している⁽¹¹⁾。また同群像については炭素14年代測定が実施され、多くが八世紀から九世紀の年代値を示す結果となっている⁽¹²⁾。また高宮氏は、同群像と類似する作例として宮城・十八夜観世音堂の菩薩立像を挙げている。八世紀後半から九世紀初めの作と推定されている同像もまた、先述した本像の諸特徴と類似する⁽¹³⁾。

こうした類似をうけて、前稿では本像の制作年代も九世紀と想定し、天長年間（八二四～八三四）と伝えられる高野寺開創年代とも矛盾しないと言及した。しかしながらその後も引き続き検討したところ、現在では本稿筆者は、前稿においてやや制作年代を古く想定し過ぎたかと考えるに至っている。

その主な根拠は、前稿で十分に行えなかった近隣作例との比較検討にある。本稿では、本像と類似した作風を示す例として、出雲市・萬福寺（大寺薬師）の日光・月光菩薩立像（図2・3）および四天王立像を新たに挙げたい。以下に類似点を説明したいが、その前に萬福寺諸像の制作年代について言及しておく。

萬福寺の主要尊像は、薬師如来坐像、日光・月光菩薩立像、大小の観音菩薩立像

二軀、四天王立像の計九軀からなる⁽¹⁴⁾。うち小さい観音菩薩立像一軀は、他像と比べ細身で大人しい作風を示しており、この一軀のみ制作年代がやや降ると考えることで諸説一致している。しかし他の八軀の制作年代は平安時代の間で諸説あり、特に四天王立像の制作年代については九世紀から十一世紀まで幅広い説が提示されている⁽¹⁵⁾。現時点では明確な結論に至っていない。そして四天王立像をめぐるこの問題は、萬福寺の他の主要尊像と同像との間に制作年代の差異を認めるか否かという新たな問題も生じさせる。これについては本稿の趣旨とは異なるため、別の機会に詳細な検討を加えたいが、差し当たり現時点での本稿筆者の見解を示しておきたい。

萬福寺の四天王立像は、当地の平安前期彫刻のなかでも卓越した迫力があり、奈良の有力寺院に伝わる九世紀の四天王像に匹敵する出来映えを示している。ただし、萬福寺の四天王立像と、小さい観音像を除いた三軀の菩薩立像との間には、後述する髻の形状や、節を含んだやや木目の乱れた材を用いていることなど、いくつかの注意すべき共通点がある。薬師如来坐像も含めた八軀は十世紀頃、同時期に制作された可能性が高いと現段階では考えている⁽¹⁶⁾。

本像と萬福寺像との比較に話を戻すと、両者の類似点は第一に、天冠台上の地髪部が半球状に高く盛り上がり、その上に球状の大きな単髻を有する点である。萬福寺諸像の中では特に日光菩薩立像と四天王立像がこの傾向を顕著に示す（図4）。

次に裾の折り返しの形状がある。本像と萬福寺日光・月光菩薩像を比較すると、いずれも裾は正面中央で三角形に近い舌状の折り返しをあらわし、その先端は尖りをみせている。中央に同心円状のゆるい孤を三条重ねるのも同じである（図5）。

特に折り返しの先端が尖る特徴は、同じく平安前期の当地の作である松江市・佛谷寺や後述する雲南市・禅定寺の諸像などには見られず、注意すべき一致であろう。また本像の腰布の縁が、正面中央で左右に分かれながら品の字状に翻りを繰り返す点は、月光菩薩像と共通する。ただ、本像の正面両脚部中央には一箇所、渦紋が表されるが、これは萬福寺のどの像にも見られない。

背面にも注目したい。本像の背面は衣文表現が大きく省略されており、条帛や裙は輪郭だけが簡潔に彫刻されている。こうした背面の大幅な省略は、例外もあらうが基本的には平安初期・九世紀初頭よりもやや降った時期の特徴とみるべきであらう。そしてこの特徴は萬福寺の月光菩薩像と合致している。さらに背面腰布の輪郭について見ると、一つの大きな弧を描きつつ、その先端が中央からやや右寄りにずれるという特徴がみられ、これも本像と月光菩薩像とで共通している。

以上のように本像には、萬福寺の諸像と近似した表現が複数確認できる。ただし、萬福寺像とは異なる特徴を有するのをもたまたま事実である。第一には面貌表現であり、本像は細長い楕円形の輪郭をし、眉や瞼の彫りが深く、厳しい表情をしている。この点は先述の通り、本像の制作年代を九世紀に想定しうる根拠といえ、萬福寺日光・月光菩薩像の丸く張った輪郭や丸みを帯びた眉、細長い三日月形の目とは一線を画する表現である。また、着衣の形状に近似する点があるとしても、全体としては本像の方が皺の流れや抑揚に現実感があり、萬福寺像は変化に乏しく形式化が進んでいる。背中を反らせて伸びやかなS字を描く側面観も本像の特徴だが、萬福寺像の側面観にはそうした変化が少ない。

つまり本像と萬福寺像には同系統の作者が想定される一方、本像の方が細部にやや古様を示している。萬福寺像の面貌や衣文については後世の手が入っている可能性も考慮すべきではあらうが、萬福寺像を先述のとおり十世紀の間の作とするならば、本像はそれより先行する可能性も含め、九世紀末から十世紀前半の作と現段階では考えておきたい。⁽¹⁷⁾

(四) 多臂像である可能性

もう一点、前稿では言及できなかった、本像をめぐる重要な問題について言及しておく。

本像を初公開した先述の展覧会の際、観覧頂いた複数の研究者から、本像が元は

多臂像だったのではないかというご指摘を頂いた。その可能性について、現状の観察を通して改めて考えたい。

本像が多臂像だと考えられる第一の根拠は側面観である。通常の二臂の菩薩立像、例えば先にとりあげた萬福寺の日光・月光菩薩立像と比べて、本像は肩が後方に大きく張り出している。この理由として最も妥当なのは、脇手をそこに取り付ける、もしくはそこから彫出するためであらう。先述のとおり本像の構造には、体幹部から遊離する部分もなるべく一材で彫出しようとする意図がみえ、それを踏まえれば、脇手があったとすればある程度の本数は体幹部材から彫出されていた可能性がある。中国地方におけるこの種の作例として、広島・古保利薬師堂の千手観音菩薩立像が挙げられる。

ここで本像の左手を確認したい。先述の通り左手の肩から肘までは、頭体幹部材から彫出された当初部が残っている。ただし左手の残存状況を側面から見ると、残存しているのは肩から上腕の前半だけで、後半は切断されて欠失し、背中にかけて一部に後補材があてられている。一般に脇手が体幹部材から彫出される場合、しばしば真手の上腕から分岐して表現される。残存状況からの推測ではあるが、本像は本来、この上腕後半の欠失部分から、脇手が彫出されていたのではなからうか。本像の右肩以下や左肘先などは江戸時代頃の後補とみられるが、その際、聖観音菩薩として信仰するに相応しいように、脇手の切断も行われた可能性がある。

本像が多臂の菩薩立像だったとすれば、平安前期に相応しい尊格としては、多臂の十一面観音、不空罽索観音、千手観音などの変化観音が候補として挙げられよう。尊格の確定には臂数だけでなく頭上面の有無も問題にならうが、いま本像の頭頂部を詳細に確認しても、そこには朽損と虫害による無数の穴が空いており、頭上面の確たる痕跡を確認することはできない。本像の当初の尊格は正確には不明と言わざるを得ないが、現存作例の多さから考えて、可能性が高いのは千手観音とみるべきか。

(五) 本像の本来的性格

本像が当初は多臂の変化観音像であったとすれば、本像の本来的性格をどのように考えられるだろうか。

先述のとおり、本像は弘化五年の高野寺罹災後に庫裏から移安された観音像に相当する可能性が高く、それ以前の来歴は不明である。『雲陽誌』によれば高野寺は、罹災前は八尺の胎蔵界大日如来坐像などを有する本格的な密教寺院であり、それは十三世紀半ばに高野山よりこの地に來た法性阿闍梨の中興によるところが大きいらしい。本像の制作年代はそれを遡るので、まず原所在地が高野寺か否かが問題となるであろう。厳密には不明と言わざるを得ないが、山下の離れた土地に安置されていた一木彫像を、あえて急峻な山深くの同寺の地に移坐するのはそれなりの労力が必要で、本像を移坐像とする積極的な理由は今のところ想定しにくい。高野寺が十三世紀に再興される以前から、本像は同寺もしくは近隣の山中に安置されていたと考えるのが、現段階では穩当のように思われる。そのように考えたとき、本像は、高野寺が中世に本格的な密教寺院として再整備される以前の、当寺の原初的性格を伝えている可能性が生ずるだろう。

古代の山林寺院の性格については豊富な議論があるが、地域における布教拠点である平地寺院の役割を補完する性格を持ち、平地寺院で布教を担う僧が山林修行を積むための場とみるのが一般的な理解といえよう。本像が平安前期に変化観音像として造像されたとすれば、造像当初はそうした山林修行の場において、尊別悔過の本尊として信仰されていた可能性がある。そして、本像と萬福寺像との親近性を前提としてさらに想像をたくましくすれば、この山林修行の場に対応する平地の拠点寺院として、萬福寺諸像の原所在寺院があったと想定することもできよう。⁽¹⁹⁾ やや先走った想像を重ねてしまったが、本像は、平安前期の島根半島における山林寺院や初期密教の様相を今に伝える貴重な作例として位置づけられる可能性があることを、

ここに指摘しておきたい。

二、日蔵寺十二面観音菩薩立像 (図6)

(一) 本像の概要

〔形状〕

高髻を結う。髻は二段にあらわし、髻頂に一、一段目に三、二段目に七の小孔を設け、二段目の背面中央にくぼみを設ける(以上に頭上面と化仏を配したとみられる)。天冠台は下から紐一条、連珠文帯、紐一条、列弁。髪は天冠台下の両耳より前面は疎ら彫り、他は平彫り。髻髪一条が耳を巨る。両肩に垂髪を垂らす。目の輪郭は明瞭に彫出ししない。耳朶環状、貫通しない。三道相。条帛、天衣、裙(折り返し付き。正面で左衽に打ち合わせる)、腰布を着ける。正面の天衣両肩部や裙の両足間に渦文を表す。左手屈臂、第一・三・四指を曲げて他を伸ばし蓮華の茎を持つ。右手は垂下し全指を伸ばす。正面を向き、腰をわずかに左に捻り、右膝を少しゆるめて右足先を上げて立つ。

〔法量(単位はセンチメートル)〕

像高	一〇七・一	頂—顎	二五・六
髮際高	九三・九	面幅	一一・八
面長	一一・五	面奥	一五・四
耳張	一四・〇	腹奥	一五・四
胸奥(左)	一二・九(右)	一三・二	
肘張	三三・五	裙裾張	二八・五
足先開(外)	一六・一(内)	六・七	

〔品質構造〕

木造。一木造り。古色。

頭体幹部は左前膊半ばまでと右手先までを含めカヤの⁽²⁰⁾一材製。内割りなし。木芯は右肩を通る線に籠める。像底に丸柄穴（径約四㎝）を穿つ。左前膊半ばより先、両足先、各別材製。表面はわずかに白色が残るものの、大半は古色を呈する。

〔保存状態〕

頭上面や化仏は全て亡失。右肩から先は当初材が一度大きく割れたものをチギリで緊結し直している。体部正面の干割れに補修痕。左前膊半ばより先、右手第二指、右体側から右手首にかかる天衣の遊離部、両足先、持物、台座、各後補。

（二）来歴と再発見の経緯

日蔵寺は出雲市の中心市街地に位置する小山町に所在。本像は同寺観音堂の本尊として伝来した。同寺は貞和二年（一三三六）の創建と伝え、現在は臨済宗に属し、近世の諸記録でも禅宗とされている。ただ、同寺本堂の本尊は平安後期作の大日如来坐像⁽²¹⁾なので、密教系の寺院にも何らかの由来を持つ可能性がある。

これから検討するように、想定される本像の制作年代は、伝えられる日蔵寺の創建年代を遙かに遡り、同寺に伝わる以前の本像の来歴は不明である。享保二年（一七一七）の地誌『雲陽誌』日蔵寺の項に「客殿観音を安置す、行基の刻彫なり」⁽²²⁾とあるのが本像に相当するとみられ、行基作とあるように当時から古像と認識されていたようだ。『雲陽誌』では「客殿」に観音を安置するとされているが、宝暦四年（一七五四）の「神門郡北方萬指出帳」の小山村、日蔵寺条には同寺の堂宇として「観音堂」⁽²³⁾がみえる。そして明治時代の『出雲国神門郡寺院明細帳』では同寺の記載のなかで「観音堂 本尊正観世音菩薩」とあり、⁽²⁴⁾本像が聖観音像として信仰されていたことがわかる。この時点で頭上面が失われていたためだろう。だが、先述したように本像には頭上面と化仏を備えた痕跡があり、元は十一面観音菩薩像だった

とみられる。

最近になって本像が注目されたきっかけは、出雲市文化財課による「出雲市歴史文化基本構想」策定のための市内文化財調査である。まず同課による予備調査で本像の存在が改めて見出され、⁽²⁵⁾相談を受けた古代出雲歴史博物館が平成二十九年（二〇一七）五月に本格調査を実施し、⁽²⁶⁾平安時代の作例と判断した。同年十月からの同館特別展で先述のとおり初公開し、価値の高さが再認識されたことをうけ、令和五年（二〇二三）三月三日、島根県指定文化財に指定された。

（三）制作年代と作風の再検討―禅定寺諸像・萬福寺諸像との比較を通して―

次に造形の特徴から、本像の制作年代を検討したい。内割りが無く、左手は前膊半ばまで、右手は垂下する手先までなるべく一材から彫成しようとする古様な構造から平安前期の作とみられるが、具体的な時期をどのように想定すべきであろうか。構造は古様であるが、彫刻表現は全体的に柔和である。大きく丸い頭部をもち、頬の張ったかわいらしい顔立ちをし、なで肩で、頭部に比べて胴体はやや短く、体軀のバランスは子供のようである。こうした柔和な特徴を示す基準作例として著名なのは、正暦四年（九九三）の作である滋賀・善水寺の薬師如来坐像である。本像の制作年代も十世紀後半と考えるべくべきだろう。

以上の見解は前稿でも示していたが、その展覧会で本像とともに県内の諸作例を一堂に展示したところ、本像と雲南市・禅定寺の諸像（重文で独尊の観音菩薩立像〔図7〕、および県指定の阿弥陀三尊像〔図8〕）とのあいだで、一部の表現や作風が共通することに新たに気がついた。このことは前稿で言及できなかったもので、ここで詳細を述べておきたい。⁽²⁷⁾

本像の特徴の一つに、渦文の多用がある。正面両肩からの天衣垂下部に渦文を連ねているほか、正面中央の両足のあいだにも渦文が上下二箇、大きく表されている。つまり正面の上半身と下半身のそれぞれ目立つ箇所に、渦文が多用されているので

ある。

渦文の使用自体は前掲の高野寺像や萬福寺薬師如来像、それに松江市・佛谷寺諸像など出雲の平安彫刻に多くの類例がある。ただしそれらはいずれも一、二箇所の渦文を像正面の脚部ないし肩などにあらわす程度であり、本像ほど多用してはいない。

これに対し、本像の渦文の用い方に近いのは禅定寺の阿弥陀如来坐像である。同像は正面左右の襟の上下に左右各二、計四箇の大きな渦文を表している。衣の自然な翻りのなかで渦文を表したというより、大きな渦文を正面の目立つ位置に連ねること、装飾としての効果をねらったものと思われる。これは、正面の天衣垂下部や下半身などに渦文を多用する本像と同一の志向といえる。

また禅定寺の諸像の衣文表現には、左右対称の規則的な太い衣文線を深く鋭く彫り重ねる点にも大きな特色がある。これは観音菩薩立像や阿弥陀如来坐像に顕著だが、規則的な太い衣文線を重ねるといふ点では、本像正面の裙や腰布にも類似した志向がみられる。一方背面では、衣文表現を大幅に省略し、輪郭以外は平滑に仕上げる点で、本像と禅定寺諸像の両者は共通する。

肉身部の皺の表現にも、いくつか注意すべき共通点がある。本像は先述の通り垂下する右手先までが当初のままであり、なかでも肘内側の皺の表現に特色がある。すなわち、括弧形をそれぞれ上下逆に向けた形（つまり、「」（「」という形）を刻み、その中央部に弛みを作って少し盛り上げた、やや凝った彫刻をしている。出雲地方の平安彫刻のなかには、例えば佛谷寺の四軀の菩薩立像の一部、安来市・清水寺十一面観音菩薩立像、海士町・清水寺観音菩薩立像など、垂下する右手も当初のまま残っている作例が少なからず存在する。しかしながらそれらの肘内側の表現は、皺として一条の刻線を刻むか、皺らしいものを全く刻まない簡略な表現であり、本像ほど凝った表現をしていない。これに対し、禅定寺の観音菩薩立像や、阿弥陀如来の両脇侍像は、先述した本像の表現と同一の特徴を有している（図9）。

また、本像が腹部の括り線を太い二条とする点にも特色があるが、これも禅定寺の観音菩薩立像や阿弥陀如来坐像と一致する。

続いて面部の特徴にも注目したい（図10）。本像の天冠台は下から紐一条、連珠文帯、紐一条、列弁と、出雲の平安前期彫刻の中ではやや込み入った意匠であるが、この意匠は禅定寺の観音菩薩立像（独尊）や阿弥陀左脇侍の観音菩薩立像と一致する。また禅定寺の阿弥陀如来坐像は、各部が角張ったブロック状をした迫力ある体つきが個性的であり、この点は本像の大人しい体つきと大きく異なるが、面貌表現に注目すると、頬が丸く張った柔和な顔つきをしているといえ、面部だけを見るならば実は本像の作風と近い。

ところで本像の着衣表現のなかで、正面で腰布が品の字状に翻りながら左右に分かれる点は禅定寺の観音菩薩立像や阿弥陀の両脇侍像と一致するのだが、この特徴は先述の萬福寺月光菩薩立像にも見られる。また太く規則的な衣文線が刻まれる志向も先述のとおり禅定寺像と共通するのだが、特に正面で左右に分かれる腰布の衣文線の形状に着目した場合、禅定寺像は太腿辺りで外側へ急な弧を描くのに対し、本像のそれはゆるやかで、萬福寺日光・月光菩薩立像のものにより近い。加えて、両肩に大きく広がる垂髪が彫出される点は、本像と萬福寺月光菩薩像とで共通する。以上のように、本像の作風や表現は全体として禅定寺諸像と近く、一部には萬福寺日光・月光菩薩立像との類似も指摘できる。先述のとおり近世以前の本像の来歴は不明であるものの、作風の検討を踏まえれば、本像は出雲地方で制作されたと考えてよいだろう。

（四）本像の意義

本像を以上の検討のとおり位置づけられるならば、出雲の平安彫刻史を考えると、本像が見出されたことにはどのような意義が認められるであろうか。

まず、制作年代と作風に稀少性がある。本像は、十世紀後半の基準作に準じた穏

やかさ、柔らかさに特色がある。これまで知られている出雲地方の重要作例の多くは、概ね平安前期の力強い作風、もしくは平安後期の定朝様のような都ぶりで洗練された作風に大別できる。本稿で本像との類似を指摘した禅定寺像にあって、平安前期の力強さを受け継ぎ、それをさらに誇張したような荒々しさを示す作風がこれまで注目されてきたのであった。こうしたなかで、本像のように平安前期の一本彫像の流れにありつつ、平安後期に流行する柔和さを兼ね備えた過渡期的特徴を示す作例は、出雲においては多くない。

さらに、平安期に遡る古像が出雲市の中心市街地において確認されたのも珍しい。これまでに、出雲で確認された平安期の作例は、大半が島根半島か中国山地の山中ないし山裾に所在する。本像が造像時点から現所在地に安置されていたのか、あるいはかつて出雲地方の別の地域に安置されていたのが後世に同地へ移坐されたのか、確実なことはいえないが、いずれにせよこれまで古代の彫像がほとんど確認されていなかった地域で新たに見出されたことは間違いない。

以上のように本像は、平安時代半ばの当地の仏像として優れた出来映えをみせると同時に、年代と作風、それに所在地のうえで、出雲の仏教彫刻史研究の空白を埋める貴重な存在だといえる。

おわりに―両作例から考える、出雲の平安彫刻史の「拡張」―

以上本稿では、近年再発見された二作例について再検討を加えた。高野寺像は平安前期、九世紀末から十世紀前半頃に造像されたと考えられ、萬福寺の主要尊像と近い表現が認められる。元は多臂の変化観音像だったとみられ、出雲地方の古代山林寺院での信仰の様相を今に伝える稀少な作例の可能性がある。また日蔵寺像は十世紀後半の柔和な作風を示し、平安前期から後期への過渡期的特徴を有する出雲では珍しい像である。出雲市街地から平安彫刻が発見されたことも珍しい。各部表現で禅定寺の諸像との類似がみられ、一部では萬福寺像と近い点も認められた。

このような特徴を持つ二作例が新たに見出されたことは、今後、出雲の平安彫刻史を考えるにあたって、どのような見通しをもたらすであろうか。

まず両像と、出雲地方の別の寺院の像との間で表現の近似が認められたことに関して考えたい。各寺院の位置関係は後掲の地図に示した(図11)。

高野寺の所在地は直線距離にすれば萬福寺と7 km程度離れており、それほど遠くはない。しかしながら古代の行政区域では前者は楯縫郡、後者は出雲郡に相当し、属する郡を異にする。両像の表現の親近性を前提とすれば、少なくとも仏像の造像、ひいては造寺そのものに関しても、郡単位を超えた組織や主体者のあったことが想定される。具体的には、複数郡に亘る領域を治めた在地有力者が造像の主体者であったことや、造寺造仏組織が郡単位を越えて活動する場合があったことなどである。両像の類似は、古代の地方仏教における造像主体者や造寺造仏組織の活動範囲を考えるにあたって、重要な示唆をもたらすであろう。

日蔵寺は、禅定寺と直線距離で約一三 km、萬福寺とは約五・五 km 離れている。古代において日蔵寺は神門郡、禅定寺は飯石郡、萬福寺は先述のとおり出雲郡に相当する。日蔵寺像についても高野寺像の場合と同様に、郡単位を越えた造仏事情が想定でき、また仮に後世に現在地へ移坐されたとみた場合、それは中近世における出雲国内での寺院間の交流と、それに伴う仏像の移動、という新たな問題を照射することになる。

また各像の関係は、所在地だけでなく作風や様式の影響関係についても、重要な問題を浮かび上がらせる。本稿で検討したように、高野寺像は萬福寺像と近似した表現を有しつつ、制作年代は若干先行すると考えられる。また日蔵寺像は各部表現で禅定寺像との類似を示しながらも、全体に穏健な作風であり、一部の表現には萬福寺像との類似が指摘できる。この検討結果をふまえれば、高野寺像、萬福寺像、日蔵寺像、禅定寺像が造像された九世紀末から十世紀後半までの約百年間、複数の寺院をまたいだ在地における持続的な造像活動と、それによる彫刻様式の継承・展

開が想定できるのではなからうか。従来、出雲に限らず、平安前期の地方造像における造仏組織の活動実態は、全くといっていいほど不明であった。高野寺像と日蔵寺像の出現は出雲におけるこうした問題の検討を可能にし、出雲の彫刻史研究を新たな段階へ引き上げる可能性を生じさせるのである。

さらに、両像とも元は独尊の変化観音像だったとみられることも重要だ。平安前期までには、地方でも変化観音への信仰が盛んになり、各地で造像されたことはよく知られている。しかしながら、古代彫像の秀作が多い出雲地方にあって、平安前・中期までの変化観音像の著名な遺例は安来市・清水寺の十一面観音菩薩立像(重文)と松江市・金剛寺の馬頭観音菩薩坐像(県指定)くらいであり、実はそれほど多くない。両像は、出雲にあってやはり古代に変化観音の信仰が盛んであったことを、改めて示してくれる。中世の出雲では、島根半島や中国山地の山中において、いくつもの本格的な密教寺院が営まれた。古代の出雲において、変化観音をめぐって営まれた初期の密教が、中世の著名なそれとどのように接続するのか、という、出雲の仏教史を考えるにあたって大変重要な問題が、ここから新たに浮かび上がるだろう。

以上のように、高野寺と日蔵寺の両像は、それぞれが貴重な古像であるだけでなく、これまで重要作例について個別に検討されてきた造像事情を連関させ、古代出雲の地域史や仏教史の問題をも新たに照らし出す。そして両像をめぐる問題が重要作例と連関するということは同時に、既知の重要作例そのものについても再検討を要求させる。現に本稿において、萬福寺諸像や禪定寺諸像などの制作年代やその前後関係といった多くの問題に触れながら、詳細な検討は別稿を期すこととしてしまった。高野寺と日蔵寺の両像は、出雲の平安彫刻史をより多様で豊かなものとし、同時に新たな検討課題を生み出す。この二つの意味で、わたしたちの出雲の平安彫刻史に対する認識を拡張させる意義深い存在なのである。

註

- (1) 本稿筆者も本誌において報告したことがある。濱田恒志「雲南市・長安寺蔵(金成地区観音堂伝来) 十一面観音菩薩坐像と毘沙門天立像について―新出作例の紹介―」、「『古代文化研究』第二十四号、二〇一六年。また直近の報告として、椋木賢治「島根県仏像調査報告(令和三年度)」、「『島根県立美術館研究紀要』第三号、二〇二二年がある。
- (2) 会期は二〇一七年十月二十日から十二月四日まで、会場は島根県立古代出雲歴史博物館特別展示室。
- (3) 島根県立古代出雲歴史博物館編『島根の仏像―平安時代のはとけ・人・祈り―』図録、同館、二〇一七年の当該像作品解説(濱田恒志執筆)。本稿の目的はこれを補完することにあるため、内容に一部重複や訂正する箇所がある点、了解されたい。
- (4) 濱田恒志・田鶴寿弥子「島根県内に所在する木彫仏像・神像の樹種調査」、「『古代文化研究』第三十一号、二〇二三年、九十七頁。
- (5) 以下、高野寺の歴史については主に次の文献を参照した。原運一編『島根県簸川郡久多美村誌』島根県簸川郡久多美村尋常・高等小学校、一九二九年、蘆田伊人編集校訂『大日本地誌大系四十二 雲陽誌』雄山閣、一九七一年、久多美郷土誌編集委員会編『郷土誌 はやさめ久多美』平田市久多美公民館、一九九二年、鳥谷芳雄「高野寺と大般若経について」、島根県平田市教育委員会編『平田市埋蔵文化財調査報告書第八集 上石堂平古墳群』島根県出雲土木建築事務所・島根県平田市教育委員会、二〇〇一年(同論文では縁起全文が翻刻、掲載されている)。
- (6) 前掲註5『大日本地誌大系四十二 雲陽誌』二五八―二五九頁。
- (7) 前掲註5『はやさめ久多美』一七三頁。
- (8) 同寺所蔵の高野寺奥院御影堂改築棟札(昭和三十年六月二十六日)ほか。
- (9) 昭和三十年六月二十五日付『山陰新報』(現・山陰中央新報)。
- (10) 実査日は二〇一七年八月七日。実査者は濱田恒志。本稿掲載の基礎データはこの実査による。
- (11) 高宮なつ美「天福寺奥院仏像群について」、「『大分県立歴史博物館研究紀要』十三、二〇一二年、二一六頁。なお、末吉武史「大分・天福寺奥院木彫群と九州の古代彫刻―悉皆調査からの展望―」、第七十六回美術史学会全国大会口頭発表、二〇一三年でも、高宮氏による制作年代の想定が追認されている。
- (12) 綿貫俊一・株式会社加速器研究所「天福寺奥院仏像群の放射性炭素年代測定(AMS測定)」、「『大分県立歴史博物館研究紀要』十三、二〇一二年。ただし同論文三十五

頁に断りがあるように、同論文で示された測定結果が必ずしも試料の伐採年代ではないことに注意が必要である。

- (13) 酒井昌一郎「〈付論〉十八夜観世音堂 菩薩立像の樹種同定結果をうけて」、『仙台市博物館調査研究報告』第三十号、二〇一〇年、三三六頁。なお、『東日本に分布する宗教彫像の基礎的調査研究―古代から中世への変容を軸に』（科学研究費補助金基盤研究（A）研究成果報告書）東北大学大学院文学研究科東洋・日本美術史研究室、二〇一〇年所収の同像作品解説（執筆は長岡龍作氏、二十二頁）では、さらに絞って八世紀末の作とされている。

- (14) 本稿掲載以外の各像の図版については、前掲註3図録等を参照されたい。

- (15) 九世紀とみる説に『島根の文化財―仏像彫刻篇―島根県立博物館、一九九〇年の当該作品解説（一一五―一一七頁。執筆は上蘭四郎氏）、東京国立博物館ほか編『特別展 仏像 一本にこめられた祈り』読売新聞東京本社、二〇〇六年の当該作品解説（二六六頁。執筆は岩佐光晴氏）などがある。一方、十一世紀ないし平安後期とみる説に、藤岡穰「大寺薬師の四天王」、『電気協会報』第九四二号、二〇〇三年、四十一頁や、京都国立博物館編（担当 浅淑毅）『科学研究費補助金「基盤研究（A）」報告書 日本における木の造形的表現とその文化的背景に関する総合的考察（報告編）』、同館、二〇一一年、七十九頁がある。なお藤岡氏論考の存在については的野克之氏からご教示を頂いた。

- (16) 八軀の表現の共通性については、前掲註3図録の「薬師如来坐像」「日光・月光菩薩立像 観音菩薩立像」「四天王立像」作品解説（一四五―一四九頁、濱田恒志執筆）で述べている。なおこのとき、八軀の共通性を認めた場合、それぞれの用材の樹種が先行研究に依る限り異なるとみられる点が問題であることにも言及した（同図録一四七頁）。しかし、その後本稿筆者は奈良国立博物館仏教美術資料研究センターの日本美術院彫刻等修理記録データベースによって大正十年（一九二一）の諸像の修理記録「島根県萬福寺国宝修繕図解々説書」に接する機会を得、そこで（小さい観音像も含めた）主要九軀の用材全てが「榿ニ類似シタル木材」と判断されていることを確認した。このように主要尊像の用材を全て同種の材だとする見解もあり、樹種については今後の科学的識別調査を俟ちたい。現時点では主要尊像のうち四天王立像にのみ、この種の調査がなされ、カヤ材と判定されている。金子啓明・岩佐光晴・能城修一・藤井智之「日本古代における木彫像の樹種と用材観Ⅱ―八・九世紀を中心に―」、『MUSEUM』第五八三号、二〇〇三年、六頁。

- (17) 本像の制作年代をこのように修正するにあたり、波及する二つの問題に言及してお

く。まず、前稿では本像が出雲において現存最古の木彫像である可能性に言及したが、制作年代が若干降ると想定したことにより再検討が必要となろう。これには、安来市・清水寺の十一面観音像や松江市・佛谷寺諸像などとの前後関係を慎重に検討する必要がある、ここでの即断は控えたい。また、本像と類似した特徴を示す天福寺奥院木彫像群の制作年代が問題となるが、前掲したように炭素14年代測定の結果が直ちに伐採年代とはいえないことから、天福寺像の実際の制作年代は九世紀初頭より降る可能性を考慮してもよいものと考ええる。

- (18) 山林寺院に関する現時点での議論の到達を示すものとして、次の文献がある。久保智康編『日本の古代山寺』高志書院、二〇一六年。

- (19) 萬福寺は現在、大寺谷と呼ばれる扇状地の末端部に位置しているが、諸像の原所在寺院はそれより三〇〇メートルほど上方に位置したと伝えられている。山下の集落との往来は容易であり、同所は平地寺院の範疇にあると捉えるべきであろう。

- (20) 前掲註4 濱田・田鶴論文、九十七頁。

- (21) 同像の存在は、出雲市教育委員会編『出雲市の文化財 第一集』同会、一九五六年、七頁で報告されている。その後前掲註2の特別展で寺外初公開、前掲註3図録、一六五―一六六頁に詳細情報を紹介したので参照されたい。

- (22) 引用は、前掲註5『大日本地誌大系四十二 雲陽誌』三三八頁による。

- (23) 島根県立図書館所蔵『旧島根県史編纂史料 近世筆写編八十三』に複写が所載。

- (24) 島根県立図書館所蔵『出雲国神門郡寺院明細帳（三）』二七九頁に当該箇所の複写が所載。

- (25) 出雲市編『出雲市歴史文化基本構想』同、二〇一七年、五十七頁に簡単に紹介されている。

- (26) 実査日は二〇一七年五月十七日。実査者は的野克之（島根県立古代出雲歴史博物館・当時）・濱田恒志。本稿掲載の基礎データはこの実査による。またその際、出雲市文化財課の協力を得た。

- (27) 本稿掲載以外の各像の図版については、前掲註3図録等を参照。なお、この問題を論ずる前提として、禪定寺の観音菩薩立像（独尊）、阿弥陀如来坐像、脇侍の観音菩薩立像、同勢至菩薩立像の四軀の間で、制作年代の異同をどのように考えるか、という重要な問題がある。本稿筆者は現在では、四軀でそれぞれ異なる個性が認められるものの基本的には四軀とも十世紀後半、近しい時期に造像されたと考えている。禪定寺にはこのほか平安時代作の三軀の天王立像も伝わっており、それらとあわせて禪定寺諸像全体の検討については、改めて別稿を期したい。

【図版の出典】

図6、9―1、10―1は出雲弥生の森博物館提供。図11は国土地理院電子地形図に加筆。他は古代出雲歴史博物館所蔵写真。

【付記】

高野寺住職高橋弘道様、日蔵寺住職加藤泰寛様をはじめとする両寺の皆様からは、両像の調査から展示、本稿公刊に至るまで、長期に亘り多大な御厚情を賜った。写真掲載については萬福寺住職松井秀宣様、禅定寺住職岡田孝照様からも御高配を賜った（各、掲載順）。また日蔵寺像については中田利枝子氏（島根県文化財保護審議会委員）から貴重な御教示を頂いた。

末筆ながらこの場を借りて右記の皆様にご心より御礼申し上げます。



図1-2 同 左側面



図1-3 同 右斜側面



図1-1 観音菩薩立像 出雲市・高野寺



図1-5 同 頭部左斜側面



図1-4 同 背面



図1-7 同 頭頂



図1-8 同 像底



図1-6 同 頭部右側面



図2-3 同 背面



図2-2 同 左側面



図2-1 日光菩薩立像
出雲市・萬福寺



図3-3 同 背面



図3-2 同 左側面



図3-1 月光菩薩立像
出雲市・萬福寺



図4-3 多聞天立像 頭部背面
出雲市・萬福寺



図4-2 日光菩薩立像 頭部背面
出雲市・萬福寺



図4-1 観音菩薩立像 頭部背面
出雲市・高野寺



図5-3 月光菩薩立像
正面 裙折り返し
出雲市・萬福寺



図5-2 日光菩薩立像
正面 裙折り返し
出雲市・萬福寺



図5-1 観音菩薩立像
正面 裙折り返し
出雲市・高野寺



図6-2 同 左側面



図6-3 同 右側面



図6-1 十一面観音菩薩立像 出雲市・日蔵寺



図6-6 同 頭部右側面

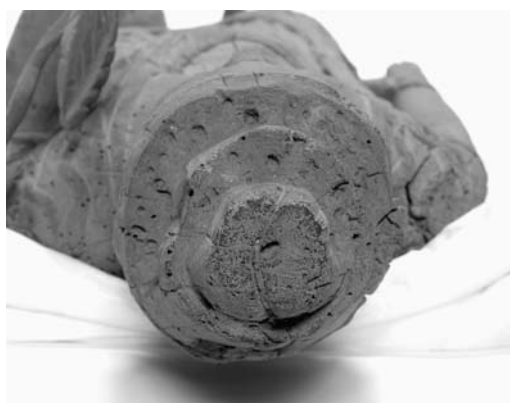


図6-7 同 頭頂



図6-8 同 像底



図6-4 同 右斜側面



図6-5 同 背面



图7 觀音菩薩立像 雲南市・禪定寺



图8 阿彌陀三尊像 雲南市・禪定寺

出雲市・高野寺観音菩薩立像と日蔵寺十一面観音菩薩立像について
—近年再発見の出雲市内所在平安彫刻二例—



図9-4 勢至菩薩立像
(阿弥陀右脇侍) 右肘内側
雲南市・禅定寺



図9-3 観音菩薩立像
(阿弥陀左脇侍) 右肘内側
雲南市・禅定寺



図9-2 観音菩薩立像
右肘内側
雲南市・禅定寺



図9-1 十一面観音菩薩立像
右肘内側
出雲市・日蔵寺



図10-4 阿弥陀如来坐像
頭部正面
雲南市・禅定寺



図10-3 観音菩薩立像
(阿弥陀左脇侍) 頭部正面
雲南市・禅定寺



図10-2 観音菩薩立像
頭部正面
雲南市・禅定寺



図10-1 十一面観音菩薩立像
頭部正面
出雲市・日蔵寺



図11 関連地図 (1: 高野寺 2: 萬福寺〔大寺薬師〕 3: 日蔵寺 4: 禅定寺)